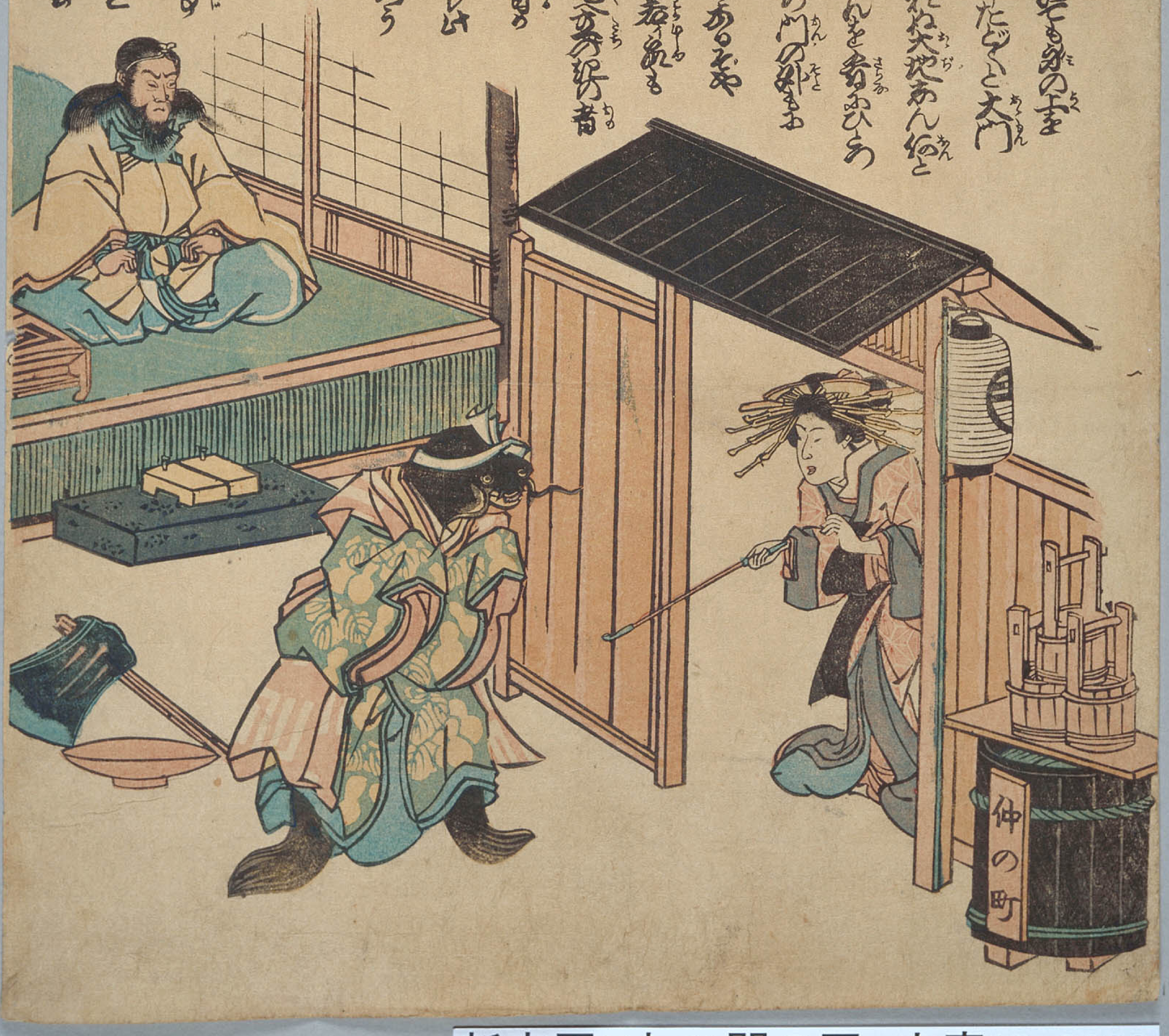
新吉原こわひ関の戸

爰に廓夜の大門をまもりてけふ此事も手も客に往ても我の手越えらざれ二階の障子をあけ黒て下ひとごに鳥肌のたんぎりたり大門迄くびでもる鼎鳥の鎧をおさへ武「田をかれハどふもいかれね大地あん念とあせ手もいかれね地んでおかいき手をでござり香けおんを奇ひあ申やけふよふござりま吾とまあのやふ女郎 あの門の外まで丸休ひ付大門をどうぞ通してくんなんし「あれ大門は大へんがあるぞや「サア大へんな物ハあやアそまあ女郎ぢやおけ大おかんに若衆も我も連れて大けい大門ハ何ふきまのや「アイ日中や後宅へ来る物者門を出しておくんなんし「ある猫出てもみろうが我身が首を「それどころでハありんせんハイナア「おちおかけまへけんのんく「コレ此大おかんぢやそあん犯であろう憎る卑も其で出さぬわやいのう「ある猫の女郎から出てもやろうがそんなにおれが田そがるこがみおがさぐてるとろげるか「アイ此中でもとろげんせうよいナ「其犯よう七んせるがさア江中へ大へんおかんそうぞうな客中も燈の手中に猫むの灰をさしても通る事もいとし世廓の外へかたりくあそべしと逃しけれ まま



新吉原こわひ関の戸　文庫10-8288
早稲田大学図書館蔵／Waseda University Library